

随想

凡庸により破壊された日本

(株)PQC研究所 加藤 宏光

ラジオでシリーズとして放送されている「東京ホンマもん教室」を主宰している、藤井聡京都大学教授の著書に『凡庸という悪魔』とタイトルされた刺激的なモノがある。

藤井聡氏は、MMT(新貨幣理論)を称える意味急進的な経済理論学者である(注1)。膨張し続ける赤字国債のリスクに警鐘を鳴らす財政緊縮派に対して、自国貨幣で発行される国債が如何に膨張しても、先進国は破綻しない。まして、「国内に蓄積される資産(国民の貯蓄を含めた)が世界最大である日本の赤字国債増発による財政破綻は有り得ない」という理論から、大いなる積極的財政で国力を再度活性化させるべきであると主張される。

主義の是非はここでは問わな

い。

一昨年突然のウクライナ侵攻で世界を混乱に陥れたロシア、昨年まさかの弾薬等の支援で世界に軽い驚きと失笑を招いた北朝鮮や付かず離れずで、微妙に支援している中国等に代表される「権威主義」が世界の脅威として取り上げられている。

それと対抗して平和の維持に懸命な「民主主義」と「権威主義」の対立構造が、イメージされている現状であろう。

しかし、著者はわが国が「擬似権威主義」に陥っているように感じられてならない。それも昨今のことではない。二〇〇一年に発足し、六年に渡った小泉政権や二〇〇七年から七年一〇か月の長きにわたって国を操った安倍政権それぞれ初期に、ある意味直感的に危うさを感じ

た。権威主義の匂いを感じたからである。

権威主義は封建時代には当たり前のシステムであり、織田信長に代表される時代の権威が独裁する社会である。権威者(独裁者)が健康者としての判断ができるときには、その社会の向かう方向を即断できる。それゆえに、民主主義のようにモタモタせずに社会の方向性が決まり、結論が早くでる(良くも悪くも・・・)。

著者の政治・社会に関しての知識は限定的であり、社会的な用語を曖昧に使用し、現実にはそれで大きな齟齬なく会話が出来るため、権威主義と全体主義を混同していた。

たまたま、Kindleに保存していた『凡庸という悪魔』というタイトルの藤井聡教授による

めに、凡庸を取り上げたのだとこのことである(平凡には時に麗しき、愛すべきものであるから、巨大な悪を生み出すものではないことを教授は強調している)。

凡庸な人々が増えると必然的に全体主義を生み出すからである。全体主義とは、とにかく、全体に従うべし、という考え方、およびそれに基づく社会現象である。その代表者がユダヤ人、トラーを中心とするナチス・ドイツであり、同規模の大殺戮を自国人に行ったソ連のスターリニズムや中国の文化大革命も全体主義現象として挙げられる。

ハンナ・アレント(注2)という哲学者は全体主義の中心概念を「テロル」と表現している。これは従わない者に対してあらゆる暴力とそれに対する恐怖をいみする。その究極で必ず「兎に角従え」の究極では従わない者を殺めるしかなくなる。つまり全体主義は文字通り世界史上最大の悪魔である。そして今日のあらゆる組織や集団に『全体主義』がはびこっている。こうした全体主義の汎

用性を理解するうえで『空気が』とかく全体に従うべしという空気』という言葉が重要なキーワードとなる。

凡庸な人々がなぜ全体主義を作るのか、それは彼ら(彼女ら)が自分自身の頭で判断することをやめ、人様のいつていることをそのままオウム返しに繰り返す態度に起因している。簡単にまとめれば、これは極めて重要なことであり、自分で考え、判断することをなくした人々は、中身の空っぽな人間であり、空疎であるからこそ(そして自分が空っぽであることを自覚していないからこそ)周囲の空気に何の疑いもなく同調してしまう。また、民主主義の問題として、このような空っぽな人々にも、選挙に際して貴重な一票が与えられる点である(太字は著者の意見)。

小泉政権に対して八〇%を超える支持が表明されたこと、安倍政権に対しても、高圧的であり、正当な議論を封じての自衛的な政治的行為に対して、強い反対民意を示すことなく選挙を介しての支持が(小選挙区と岩盤支持層、および低い投票率とい

う事情を加味しても)長期に維持された異常性をみても、わが国の人びとや組織全体に全体主義が蔓延しているように感じられてならない(注3)。

右を見て左を見て、周りを付度して投票している人々は凡庸と評されても仕方あるまいし、そうした社会風潮が、この国を第二次大戦に引きずり込んだ全体主義への道を再び歩む愚を犯さないか、戦中生まれの本著者にとって他人事でない心配事である。

随分昔に観た映画『ネバーエンディングストーリー』で、最も恐ろしい怪物は「虚無 nothing」である、と主人公(アトレイユ)に説いたロックバイター(岩の怪物)の言葉を思い出した。

注1:藤井聡(ふじいさとし)は、一九六八年(昭和四三年)十月十五日生まれ。日本の土木工学者、社会工学者、評論家。学位は博士(工学)(京都大学・一九九八年)。京都大学大学院工学研究科教授、同大学レジリエンス実践ユニット長。カールスタード(カールスタッド)大学客員教授。『表現者クライテ

書物を開いてみた。凡庸について改めて考えさせられた。教授によれば「凡庸」と「平凡」は全く異なるものであるという。平凡は月並みなどという意味で、どこにでもある普通の暮らしを意味するから、当たり前の暮らしをする、という表現には良い意味や美徳を含むこともある。一方で「凡庸」という言葉には良いというニュアンスが全く含まれない。

凡庸な作品、凡庸な人物という表現は陳腐な作品や陳腐な人物と言い換えることができる(とは藤井教授の言)。平凡は英語で commonness(共通)であり、凡庸の英語は banality という単語で、陳腐さ・つまらなさを意味する。この「凡庸さ」が巨大な悪を生み出すのであり、この巨大な悪を解説するた

注2: Hannah Arendt、一九〇六年十月十四日(一九七五年十二月四日)は、ドイツ出身のアメリカ合衆国の政治哲学者、思想家。ドイツ系ユダヤ人であり、ナチズムが台頭したドイツからアメリカ合衆国に亡命し、教鞭をとった。代表作は『全体主義の起源』(一九五一年)

注3:私見としてであるが、小泉純一郎氏は、竹中平蔵氏を介して労働力という貴重な財産を市場経済に投げ出し、またアメリカ型の競争市場を最善のモノとして、わが国の経済をある意味変形させてしまった点、安部氏においても、公定歩合を限界まで下げ、赤字国債の無秩序な増刷で巨視的な国の経済方向性を危めた点で、どうしても納得できない政治家の代表である